



看護学生のHighly Sensitive Person (HSP) 特性と 領域別看護学実習における不安との関係

藤木, 千晶
木村, 裕治
正垣, 淳子
宮脇, 郁子

(Citation)

Bulletin of health sciences Kobe, 40:47-56

(Issue Date)

2024

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100495544>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495544>



看護学生の Highly Sensitive Person (HSP) 特性と 領域別看護学実習における不安との関係

藤木千晶¹ 木村裕治² 正垣淳子² 宮脇郁子²

要旨

【目的】 本研究は、学生の特性や不安の内容に沿った、効果的な実習指導に資するために、看護学生の Highly Sensitive Person (以下 HSP) 特性と領域別看護学実習における不安との関係を明らかにすることを目的とした。

【方法】 領域別看護学実習直前の大学 3 年生対象とし、「Highly Sensitive Person Scale 日本版 (以下、HSPS-J19)」と「領域別看護学実習不安評価尺度」を用いたアンケート調査を行った。HSPS-J19 の総得点が高い上位 20% を HSP 群、それ以外を非 HSP 群とし、HSP 特性と領域別看護学実習における不安との関係について、Mann-Whitney U 検定 (Z 値) を用いて分析を行った。

【結果】 58 名を分析対象とした。11 名を HSP 群、47 名を非 HSP 群とした。領域別看護学実習不安評価尺度の総得点の中央値は HSP 群 : 99.00 点、非 HSP 群 : 90.00 点で、有意な差が見られた ($Z=-2.590, p=0.010$)。第 1 因子 (実習中の対人関係に対する不安) の中央値は HSP 群 : 39.00 点、非 HSP 群 : 34.00 点で、有意な差が見られた ($Z=-2.474, p=0.013$)。第 2 因子 (実習における自己の能力に対する不安) の中央値は HSP 群 : 24.00 点、非 HSP 群 : 21.00 点で、有意な差が見られた ($Z=-2.593, p=0.010$)。第 3 因子 (看護実践に対する不安) の中央値は HSP 群 : 37.00 点、非 HSP 群 : 35.00 点で、有意な差が見られなかった ($Z=-1.937, p=0.053$)。

【考察】 分析の結果、HSP 特性を持つ学生の方が、実習における対人関係と自己能力に対する不安が高いことが明らかになった。指導教員や臨地指導者は学生のこれらの不安を把握した上で、学生が対人関係や自身の能力についてどのように捉えているのかを共有し、学生が自身の特性に気づき、経験を次の実践にいかせるよう関わるのが重要である。

キーワード

看護学生、HSP 特性、領域別看護学実習、不安

¹ 神戸大学医学部附属病院看護部

² 神戸大学大学院保健学研究科

I. 緒言

看護学実習は、学生が学んできた知識を基盤とし、看護の知識・技術・態度を統合、深化し、検証することを通して、実践へ適用する能力を修得する授業¹⁾である。特に領域別看護学実習は、対象の健康レベルと特性に応じた専門的な知識や技術を獲得し、より個別的な看護過程を展開することが主な課題となる²⁾³⁾。学生は自身の看護実践や、患者や臨地指導者等との対人関係に不安を感じており³⁾、実習前にそれらに対する不安や緊張は高まり²⁾⁴⁾、実習前をピークに実習後に向けて軽減していくこと⁵⁾が報告されている。学生はこれらの心理的負担に対処しながら実習を乗り越えることが求められる。

近年、感覚処理感受性 (Sensory-Processing Sensitivity : 以下、SPS) が高い人を指す Highly Sensitive Person (以下、HSP) という気質が注目されており、HSP 特性を持つ大学生と抑うつや不安との関連が注目され、多くの調査が行われている⁶⁻⁸⁾。HSP 特性の特徴としては、抑うつや不安が高く⁷⁾、大きな音や眩しい光といった刺激に対し敏感で⁹⁾、精神的健康、主観的幸福感が低いことが明らかになっている¹⁰⁾。HSP 特性は、全人口の 15~20%程度が有すると報告されており⁶⁾、看護学生においても HSP 特性を有する学生がいると考えられる。実習中の学生の中には、臨地指導者の指導の受け取り方に違いが見られ、時には対処がうまくできず、カウンセリングを利用したり、心療内科や精神科に通院したりしながら実習に取り組む学生も少なくない。その要因の一つとして、不安をより強く感じる HSP 特性⁷⁾が関係しており、実習前に抱えた不安に、さらに実習中の心理的負担が加わることで対処しきれない状況に陥っていると考えた。HSP 特性を持つ学生への領域別看護学実習における教育支援においては、できるだけ実習における不安を軽減できるような支援方法の検討が重要である。そのためには、まず HSP 特性を有する学生が、不安が最も高まるとされる実習前にどのようなことに不安を感じているのか、その特徴を捉えることが必要であると考えた。

これまで HSP 特性を持つ大学生については、社会的内向性と関連しているが同一ではないこと⁶⁾、現状を受け入れる能力が高い人は不安が高くないこと⁷⁾、男性よりも女性の方が HSP 特性を持つ傾向にあること⁸⁾が明らかになっている。しかし、HSP 特性をもつ看護学生を対象とした調査は行われていない。看護学生の実習についての不安と関係する特性については、実習前と実習中では、日本版 State Trait Anxiety Inventory (STAI) の状態不安が高いこと²⁾¹⁰⁾、また、実習ストレスが高い者は、矢田部・ギルフォード検査 (YG) で「気分の変化」、「非協調的」、「情緒不安定」、「社会的不適応」等の項目の点数が高く、ストレス反応と学生の性格の関係性が高いこと¹¹⁾が明らかになっている。しかし、看護学生の HSP 特性と領域別看護学実習における不安との関係については検討されていない。

そこで、本研究では、HSP 特性を有する看護学生の領域別看護学実習における教育的支援のあり方を検討するために、看護学生の HSP 特性と領域別看護学実習における不安との関係を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究デザイン

関係探索（量的記述研究）デザイン

2. 研究対象

本研究では、看護学生の Highly Sensitive Person (HSP) 特性と領域別看護学実習における不安との関係を明らかにするため、基礎看護学実習を経験後、領域別看護学実習のオリエンテーションを受け、実習開始約1ヶ月前であるA大学看護学専攻3年生82名を対象とした。

3. データ収集方法

アンケート調査用紙もしくは Google Forms を用いたインターネット調査とした。3年次後期の領域別看護学実習開始前に、対象となる学生に本研究について文書と口頭で説明し、協力研究アンケート調査紙と Google Forms の QR コードを記載した用紙を配布した。回答をもって同意とみなし、対象者から回答を得た。

4. 調査内容

1) 看護学生の HSP 特性

看護学生の HSP 特性については「Highly Sensitive Person Scale 日本版（以下、HSPS-J19）」⁸⁾を用いて調査した。この尺度は、感覚閾値の低さに関する「第1因子：低感覚閾（Low Sensory Threshold :LST）」7項目（範囲7点～49点）、刺激に対する反応性を示す「第2因子：易興奮性（Ease of Excitation :EOE）」8項目（範囲8点～56点）、精神生活の豊かさに関する「第3因子：美的感受性（Aesthetic Sensitivity :AES）」4項目（範囲4点～28点）の3因子、計19項目から構成される。各項目について「非常にあてはまる（7点）」、「かなりあてはまる（6点）」、「ややあてはまる（5点）」、「どちらともいえない（4点）」、「あまりあてはまらない（3点）」、「ほとんどあてはまらない（2点）」、「まったくあてはまらない（1点）」の1から7点で回答を得る尺度であり、クロンバックアルファ係数は全体が $\alpha=0.78$ 、下位尺度である「低感覚閾」が $\alpha=0.78$ 「易興奮性」が $\alpha=0.71$ 「美的感受性」が $\alpha=0.57$ で、信頼性・妥当性が確認されている。総得点（範囲：19点～133点）および各因子が評価され、点数が高いほど SPS が高いことを示す。なお、本尺度は現在までカットオフ値は明確でない。先行研究において、HSP 特性をもつ人は全人口の15～20%存在していることに基づき、合計得点の20%程度を HSP 群、それ以下を非 HSP 群と設定されていることが報告されている⁶⁾¹²⁾。

2) 領域別看護学実習における不安

看護学生が抱く領域別看護学実習に対する不安は「領域別看護学実習不安評価尺度」³⁾を用いて調査した。この尺度は「第1因子：実習中の対人関係に対する不安」8項目（範囲8点～48点）、「第2因子：実習における自己の能力に対する不安」4項目（範囲4点～24点）、「第3因子：看護実践に対する不安」7項目（範囲7点～42点）の3因子、計19項目から構成される。各項目について、「全くそう思わない（1点）」、「そう思わない（2点）」、「どちらかというそう思わない（3点）」、「どちらかというと思う（4点）」、「そう思う（5点）」、「大変そう思う

(6点)」の1から6点で回答を得る尺度であり、クロンバックアルファ係数は全体が $\alpha=0.89$ 、下位尺度である「実習中の対人関係に対する不安」が $\alpha=0.84$ 、「実習における自己の能力に対する不安」が $\alpha=0.82$ 、「看護実践に対する不安」が $\alpha=0.81$ であり、信頼性・妥当性が確認されている。総得点および各因子が評価され、点数が高いほど不安が高いことを示している。

3) 基本的属性

基本的属性は、性別について尋ねた。

5. 分析方法

HSP 群、非 HSP 群の分類については、HSPS-J19⁸⁾ の項目において、すべての得られたデータの総得点の上位 20% を HSP 群、それ以外を非 HSP 群とした。HSP 特性と領域別看護学実習における不安の関係を見るために、HSP 群、非 HSP 群で「領域別看護学実習不安評価尺度」³⁾ の総得点、及び 3 因子の得点に差があるかの検定を Mann-Whitney U 検定 (Z 値) を用いて行った。なお、有意水準は 0.05 未満とした。統計学的分析には IBM SPSS Statistics Ver.29 を用いた。

6. 倫理的配慮

調査の実施においては、研究対象者に研究説明書を提示し、口頭にて研究の目的および方法、協力および同意撤回の自由、不参加による不利益は受けないこと、得られた情報の厳守、学術資料以外の目的で使用しないこと、無記名の質問紙のため回答提出後の撤回はできないことについて説明した。また、研究へ協力しなかった場合でも学習上の不利益はないことを十分に説明し、強制力が働かないよう説明は教員以外の研究者が行った。アンケートには調査に回答をもって同意とした。なお、本研究は、神戸大学大学院保健学研究科倫理委員会の承認を得て行なった (承認番号 1177)。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の背景

対象者の背景を表 1 に示した。A 大学看護学専攻 3 年生 82 名にアンケート調査の依頼をし、60 名から回答を得た (回収率 74.1%)。そのうち回答に欠損があった 2 名を除外し、58 名を分析対象とした (有効回答率 96.7%)。男性 2 名、女性 56 名であり、HSP 群は女性 11 名のみで、男性に該当者はなかった。非 HSP 群は男性 2 名、女性 45 名の合計 47 名であった。

表 1 : 対象者の背景 (n=58)

性別/HSP	HSP群	非HSP群
男性	0	2
女性	11	45

単位 : 人

2. 看護学生の HSP 特性と領域別看護学実習における不安

1) 看護学生の HSPS-J19

HSPS-J19 の総得点の HSP 群の中央値は 109.00（四分位範囲 100.00~110.00）点、非 HSP 群の中央値は 79.00（四分位範囲 75.00~87.00）点であった。第 1 因子（LST）の HSP 群の中央値は 40.00（四分位範囲 37.00~47.00）点、非 HSP 群の中央値は 29.00（四分位範囲 26.00~35.00）点であり、第 2 因子（EOE）の HSP 群の中央値は 45.00（四分位範囲 42.00~47.00）点、非 HSP 群 33.00（四分位範囲 29.50~37.00）点であり、第 3 因子（AES）の HSP 群の中央値は 19.00（四分位範囲 18.00~24.00）点、非 HSP 群の中央値は 18.00（四分位範囲 16.00~20.00）点であった。看護学生の HSPS-J19 の総得点および各因子の得点については表 2 に示した。

表 2：看護学生の HSPS-J19 の総得点および各因子の得点

HSPS-J19	全体 (n=58)		HSP群 (n=11)		非HSP群 (n=47)		Z値	U値	p値
	中央値	四分位範囲	中央値	四分位範囲	中央値	四分位範囲			
総得点	84.00	(77.00-93.00)	109.00	(100.00-110.00)	79.00	(75.00-87.00)	-5.132	0.000	<0.001
第1因子 (LST)	32.00	(26.00-36.00)	40.00	(37.00-47.00)	29.00	(26.00-35.00)	-4.500	32.000	<0.001
第2因子 (EOE)	34.50	(30.00-39.00)	45.00	(42.00-47.00)	33.00	(29.50-37.00)	-4.559	29.000	<0.001
第3因子 (AES)	18.00	(16.00-21.00)	19.00	(18.00-24.00)	18.00	(16.00-20.00)	-1.937	161.500	0.053

LST：低感覚関 EOE：易興奮性 AES：美的感受性

2) 看護学生の領域別看護学実習に対する不安

看護学生の領域別看護学実習に対する不安の総得点は、全体で中央値が 92.00（四分位範囲 82.00~99.00）点、HSP 群で中央値が 99.00（四分位範囲 93.00~107.00）点、非 HSP 群で中央値が 90.00（四分位範囲 81.00~97.00）点であった。第 1 因子（実習中の対人関係に対する不安）の得点は、HSP 群で中央値が 39.00（四分位範囲 33.00~43.00）点、非 HSP 群で中央値が 34.00（四分位範囲 27.00~38.00）点であり、第 2 因子（実習における自己の能力に対する不安）の得点は、HSP 群で中央値が 24.00（四分位範囲 22.00~24.00）点、非 HSP 群で中央値が 21.00（四分位範囲 20.00~23.00）点であり、第 3 因子（看護実践に対する不安）の得点は、HSP 群で中央値が 37.00（四分位範囲 36.00~40.00）点で、非 HSP 群で中央値が 35.00（四分位範囲 31.00~39.00）点であった。看護学生の領域別看護学実習に対する不安の得点については表 3 に示した。

3. 看護学生の HSP 特性と領域別看護学実習に対する不安との関係

看護学生の領域別看護学実習に対する不安の総得点は、HSP 群で中央値が 99.00（四分位範囲 93.00~107.00）点、非 HSP 群で中央値が 90.00（四分位範囲 81.00~97.00）点で、HSP 群の方が高く、有意な差が見られた（ $Z=-2.590$, $p=0.010$ ）。第 1 因子（実習中の対人関係に対する不安）の得点は、HSP 群で中央値が 39.00（四分位範囲 33.00~43.00）点、非 HSP 群で中央値が 34.00（四分位範囲 27.00~38.00）点で、HSP 群の方が高く、有意な差が見られた（ $Z=2.474$, $p=0.013$ ）。第 2 因子（実習における自己の能力に対する不安）の得点は、HSP 群で中央値が 24.00（四分位範囲 22.00~24.00）点、非 HSP 群で中央値が 21.00（四分位範囲 20.00~23.00）点で、HSP 群の方が高く、有意な差が見られた（ $Z=2.593$, $p=0.010$ ）。第 3 因子（看護実践に対する不安）の得点は、HSP 群で中央値が 37.00（四分位範囲 36.00~40.00）点で、非 HSP 群で中央値が 35.00（四分位範囲

困 31.00~39.00) 点であり、有意な差が見られなかった ($Z=-1.937, p=0.053$)。看護学生の HSP 特性と領域別看護学実習の不安の関係は表 3 に示した。

表 3：看護学生の HSP 特性と領域別看護学実習における不安の関係

領域別看護学実習不安評価尺度	全体 (n=58)		HSP群 (n=11)		非HSP群 (n=47)		Z値	U値	p値
	中央値	四分位範囲	中央値	四分位範囲	中央値	四分位範囲			
総得点	92.00	(82.00-99.00)	99.00	(93.00-107.00)	90.00	(81.00-97.00)	-2.590	128.000	0.010
第1因子 (実習中の対人関係に対する不安)	34.00	(29.00-38.00)	39.00	(33.00-43.00)	34.00	(27.00-38.00)	-2.474	134.000	0.013
第2因子 (実習における自己の能力に対する不安)	22.00	(20.00-24.00)	24.00	(22.00-24.00)	21.00	(20.00-23.00)	-2.593	130.000	0.010
第3因子 (看護実践に対する不安)	35.50	(33.00-39.00)	37.00	(36.00-40.00)	35.00	(31.00-39.00)	-1.910	162.500	0.056

IV. 考察

本研究では、HSP 特性を有する看護学生の領域別看護学実習における教育的支援のあり方を検討するために、領域別看護学実習直前の大学 3 年生を対象に、HSP 特性と領域別看護学実習に対する不安の関係について検討した。分析の結果、領域別看護学実習不安評価尺度³⁾の下位尺度である「実習中の対人関係に対する不安」と「実習における自己の能力に対する不安」の得点が、HSP 特性を持つ学生の方が HSP 特性を持たない学生よりも高かった。「看護実践に対する不安」においては、HSP 特性の有無による差は見られなかった。以下、本研究の対象者の特徴、および看護学生の HSP 特性と領域別看護学実習に対する不安の関係について考察する。

1. 本研究の対象者の特徴

本研究の対象者は、全対象者数 58 名のうち女性が 56 名と女性の比率が高く、HSP 特性は女性にのみ認められた。

また、領域別看護学実習不安評価尺度において、田辺ら³⁾の研究における、領域別看護学実習を控えた 4 校の私立系看護大学の 3 年生 349 名を対象とした調査結果では、全体の平均値が 90.50 点 (SD12.8)、第一因子の平均値は 33.94 点、第 2 因子の平均値は 22.00 点、第 3 因子の平均値は 34.55 点であった。本研究では全体の中央値が 92.00 (四分位範囲 82.00~99.00) 点、第 1 因子の中央値は 34.00 (四分位範囲 29.00~38.00)、第 2 因子の中央値は 22.00 (四分位範囲 20.00~24.00)、第 3 因子 35.50 (四分位範囲 33.00~39.00) であり、ほぼ同様の得点であった。このことから本研究の対象者は、中央値と平均値の比較であり厳密な比較は行えないものの、先行研究の対象者と同様の不安の傾向を持つ学生であったと言える。

2. 看護学生の HSP 特性と領域別看護学実習に対する不安との関係

1) 看護学生の HSP 特性と実習中の対人関係に対する不安との関係

本調査において、HSP 特性を持つ看護学生は、HSP 特性を持たない学生よりも、領域別看護学実習の対人関係に対する不安が高いことが明らかとなった。

実習において、学生は患者だけでなく、臨地指導者を含む看護師、指導教員、他の学生など多くの人と関わる必要がある。看護学生は実習先の臨地指導者や指導教員との関係に対してス

トレスを感じやすく、グループの学生との関係に対してはストレス度が低い¹³⁾。これは、学生同士はこれまでの学生生活でお互いに関係が築かれているが、臨地指導者や指導教員とは十分な関係が築かれていないまま臨地実習に臨むためと考えられ、さらに HSP 特性を持つ大学生は、HSP 特性を持たない人よりも、対人関係における言動以外の雰囲気を感じ取れるという特徴⁹⁾や他者の気分に左右されやすいという特徴⁸⁾を持つ。以上より、HSP 特性を持つ看護学生は、臨地指導者や指導教員との関係構築に対しては、より強い不安を感じやすいといえる。さらに HSP 特性をもつ人は、人から観察されている、社会的に判断されていると感じた際には、失敗を恐れて、困難を示す傾向があると報告されている⁶⁾。よって周囲から評価されると感じやすいカンファレンスのような場面において学生は、失敗の恐れから自身の考えを表現することに困難を示してしまい、そのような経験が自身を評価する立場に有る臨地指導者や指導教員との関係に対する不安につながると考えられる。

2) 看護学生の HSP 特性と実習における自己の能力に対する不安との関係

本調査において、HSP 特性を持つ看護学生は、HSP 特性を持たない看護学生よりも、領域別看護学実習における自己の能力に対する不安が高いことが明らかになった。

実習における自己の能力に対する不安の内容は、実習中の失敗や指導者からの質問に対して対処できるかに対する不安が含まれている。HSP 特性にかかわらず、看護学生にとって実習中の失敗や指導者からの質問内容は、予測が難しいことも少なくないといえる。また、HSP 特性は自尊感情が低く¹⁰⁾、自己効力感の低さや否定的情動と関連がある¹⁴⁾と報告されている。これらから、特に HSP 特性を持つ看護学生は、予測できないことが起きた際に、対処することが十分できず、そのことを否定的な経験と捉える可能性があり、自己の能力に対する不安が高まると考えられる。さらに、観察されている状況では、緊張や動揺のあまり、いつもの力を発揮できなくなると感じる⁸⁾ため、学生にとって実習中の環境は、自己の能力に対する不安をより助長していると考えられる。

3) 看護学生の HSP 特性と実習における看護実践に対する不安との関係

HSP 特性と領域別看護学実習の看護実践に対する不安とは関係がないことが明らかになった。

本研究で使用した領域別看護学実習不安評価尺度³⁾における看護実践に対する不安の質問項目は、患者と関わる場面に焦点を置いた不安について問うものが多くあった。学生は、患者と看護展開していく上で、患者のことを知るためにコミュニケーションをとる必要がある。HSP 特性は他人に共感しやすく、言動以外の雰囲気を HSP 特性を持たない人よりも感じ取れるという特徴がある⁹⁾。これらのことより、HSP 特性を持つ看護学生は患者と関わる場面において、患者の身体状況や心理状況の変化をくみ取ることができるため、看護実践に対する不安については他の学生と差がなかったと考えられる。

3. HSP 特性を有する看護学生の領域別看護学実習における教育的支援への示唆

HSP 特性を持つ学生への領域別看護学実習における教育支援においては、HSP 特性を持つ看護学生の特徴を捉えた上で、臨床実習における不安の内容に沿った支援が必要である。本研究において HSP 特性を持つ学生は、対人関係に対する不安と自己能力に対する不安が高いことが

明らかになった。HSP 特性は人から観察されている、社会的に判断されていると感じた際には特に、失敗を恐れて、困難を示す傾向があり⁶⁾、看護学生を評価する立場にある指導者や教員との関わりには特に不安を抱きやすいといえる。このことから、指導教員や臨地指導者は HSP 特性を持つ学生が、対人関係を築くことや、実習中の失敗、臨地指導者からの質問に不安を抱えていないかに十分配慮し、失敗をしたとしても、寛容的に関わることが重要であると考えられる。また、HSP 特性が高い人は内省力が高い¹⁵⁾ことから、指導においては、その特性を自己評価し、過敏であることに対処するスキルを身につけるよう導くことが有効である⁶⁾とされている。HSP 特性を持つ学生には、実践における学生の行動や思考の特徴を学生自身が気づき、次につながる経験と昇華できるような支援を行うことが不安軽減につながると考えられる。また、領域別看護学実習においては、教員が基礎看護学実習での学生の特徴を把握し、各実習間で教員同士が情報共有することで、事前に該当学生への支援方法について検討しておくことも重要である。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、対象を A 大学看護学専攻 3 年生のみとしており、他大学の学生の特性について検討できていない。また、本研究の対象者は、COVID-19 感染拡大の影響により、基礎看護学実習が、半日実習となり、時間が限られていたという背景がある。これらのことから、領域別看護学実習直前の不安の内容や大きさに影響している可能性が考えられる。そのため、複数の大学での実施を検討するとともに、今後は COVID-19 感染拡大が落ち着いた状況での調査を実施した上での検討が必要であるといえる。また、看護学生に限らず、卒業後の看護師新人教育においても、HSP 特性に関する調査を行い、HSP 特性に合わせた教育支援が必要になると考えられる。

V. 結語

本研究では、HSP 特性を有する看護学生の領域別看護学実習における教育的支援のあり方を検討するために、領域別看護学実習直前の大学 3 年生を対象に、HSP 特性と領域別看護学実習における不安の関係について検討した。その結果、領域別看護学実習に対する不安において、領域別看護学実習不安評価尺度の下位尺度である「実習中の対人関係に対する不安」と「実習における自己の能力に対する不安」が、HSP 特性を持つ学生の方が HSP 特性を持たない学生よりも高かったが、「看護実践に対する不安」においては、HSP 特性の有無による関係は見られなかった。この結果から、指導教員や臨地指導者は HSP 特性を有する学生の不安の内容を把握した上で、学生が対人関係や自身の能力についてどのように捉えているのかを共有し、学生が自身の特性に気づき、経験を次の実践にいかせるよう関わることが重要である。

参考文献

- 1) 文部科学省. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 第二次報告, 看護学実習ガイドライン 2020 年. https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf (参照日: 2024 年 4 月 15 日)
- 2) 櫻井美奈, 中原るり子, 岸田泰子, 他. 新設 A 看護系大学生の領域別実習前における心理社会的状況の検討. 共立女子大学看護学雑誌 3: 38-48, 2016.
- 3) 田辺幸子, 鈴木英子, 川村晴美, 他. 領域別看護学実習における看護学生の不安を評価する尺度の開発. 日本健康医学会雑誌 30 (4): 395-406, 2022.
- 4) 樋之津淳子, 林啓子, 村井文江, 他. 臨地実習における看護学生の気分変化と自律神経反応との関連. 札幌市立大学研究論文集 1 (1): 31-34, 2005.
- 5) 重岡秀子, 池本かづみ, 沼田郁子, 他. 成人看護学実習前・後における学生が感じるストレス感情と不安状態の実態調査. 日本看護研究学会雑誌 38 (3): 173, 2015.
- 6) Aron, E. N. & Aron, A. Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology* 73:345-368, 1997.
- 7) Kaitlyn Bakker, Richard Moulding. Sensory-Processing Sensitivity, dispositional mindfulness and negative psychological symptoms. *Personality and Individual Differences* 53(3):341-346, 2012.
- 8) 高橋亜希. Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19) の作成. 感情心理学研究 23(2): 68-77, 2016.
- 9) エレイン・N・アーロン. 敏感すぎる私の活かし方, 高感度から才能を引き出す発想術. (訳) 片桐恵理子. 東京, パンローリング株式会社, 2020.
- 10) 上野雄己, 高橋亜希, 小塩真司. Highly Sensitive Person は主観的幸福感が低いのか?—感覚処理感受性と人生に対する満足度, 自尊感情との関連から—. 感情心理学研, 27 (3): 104-109, 2020.
- 11) 近村千穂, 石崎文子, 小山矩, 他. 看護臨床実習におけるストレス状況と性格との関連, 人間と科学. 県立広島大学保健福祉学部誌 7 (1): 187-196, 2007.
- 12) 岩川祐依. 日本における感覚の感受性に関する研究の動向: 感覚処理感受性, 及び Highly Sensitive Person の研究を中心に. 甲南女子大学大学院論集 20: 21-32, 2022.
- 13) 加島亜由美, 樋口マキエ. 臨地実習における看護学生のストレスとその対処法. 九州看護福祉大学紀要 7 (1): 5-13, 2005.
- 14) Arne Evers, Jochem Rasche, Mare J.Schabracq. High Sensory-Processing Sensitivity at Work. *International Journal of Stress management* 15:189-198, 2008.
- 15) Pluess, M. & Belsky, J. Vantage sensitivity: Individual differences in response to positive experiences. *Psychological Bulletin* 139(4):901-916, 2013.

The relationship between Highly Sensitive Person traits among nursing students and their anxieties in the Specific Field Nursing Practicum

Chiaki FUJIKI¹, Yuji KIMURA², Junko SHOGAKI², Ikuko MIYAWAKI²

Abstract

This study examined the relationship between highly sensitive person (HSP) traits and anxiety levels among nursing students during the Specific Field Nursing Practicum, aiming to inform tailored practicum guidance. A survey was conducted among third-year university students utilizing the Japanese version of the 19-item Highly Sensitive Person Scale (HSPS-J19) and a scale assessing anxiety toward specific nursing practicum fields. Among the 58 participants, 11 were identified as HSP. HSP students demonstrated significantly higher median total scores for practicum-related anxiety compared to non-HSP students ($Z = -2.590, p = 0.010$). Substantial disparities were observed in anxiety related to interpersonal relationships ($Z = -2.474, p = 0.013$) and personal abilities ($Z = -2.593, p = 0.010$), although no significant difference was found in anxiety associated with nursing practice ($Z = -1.937, p = 0.053$). These findings highlight heightened anxiety levels among HSP students in interpersonal interactions and self-perceived capabilities during the practicum. Therefore, instructors and clinical supervisors should provide targeted support, focusing on understanding students' concerns and their perceptions of interpersonal relationships and personal abilities. By understanding the concerns of students, exploring how they perceive interpersonal relationships, and fostering self-awareness through their experiences, educators can better support HSP students.

Keywords

Nursing students, Anxiety, Highly sensitive person traits, Specific field nursing practicum

¹ Department of Nursing, Kobe University Hospital

² Kobe University Graduate School of Health Science